

スポーツ選手の人格構造Ⅲ

—スポーツと性格形成—

後藤清志・清水正典*・梶谷信之**

1. はじめに

スポーツとは、組織化され競争的な総体としての身体活動 (Kenyon, 1974) で、人間の基本的欲求を満足させてくれる機会と自己の身体的能力を最高に発揮できる機会を提供する。競技場での相手選手との戦いでは自己の存在を表せることができ、競技の結果により勝利を得、他人から祝福されることによって自己満足を味わえる。

スポーツ場面での技術の追求や記録に対する挑戦は、普段の練習による技術の向上のみならず、試合場面での精神的苦痛と孤独との戦いである心理的葛藤を克服しなければならない。従って、このような環境条件はスポーツ選手らの精神的特質に何等かの影響を与え、共通たる性格類型が形成されることが考えられる。

スポーツと性格発達に関して、最も一般的に接することができる事例は、スポーツと遊びが児童の性格発達に及ぼす効果を通して理解できる。即ち、乳児期及び児童期の遊びとスポーツは、初期の性格発達において重要な原因になると言える。児童達はこのような遊びとスポーツを通して、情緒調節、独立心、自信、勇気などを習得し始めるのである。児童達は、しだいに生活のストレス状況を克服し適応して、かなり程度の良い成果を得られ、社会的規範に合わせて他人と協同し、競争することを学ぶようになる。このような性格の発達に影響を与える要因としては、遺伝、体格、成熟度、両親、同年輩、大人達の関心そして成功の度合等である。これらの要因は、性格発達の度合と方向に直接あるいは間接的に影響を与えるようになる。

長い間スポーツ心理学者らは、優秀な選手達に現れる性格特性とスポーツ種目別に選手間の著しい性格の差を究明するために多くの努力を費やしてきた。これらの研究は、選手がある特定のスポーツに熟練するようになる生理的、生体力学的要因等は競技力向上に限界を覚え、究極的には性格をはじめ様々な心理的変数が遂行の差を生み出すものと信じている。性格特性の研究が競技の成功を予測するのに役立つ、個人が心理的に特定のスポー

ツに適合することが確認できるなら、選手やコーチには具体的な手助けとなるであろう。

このような理由から、今までに性格特性に関する数多くの研究結果が発表された。これらの研究は、運動選手と非運動選手、成功した選手と成功してない選手、位置に基づく性格特性、個人競技と集団競技、男性選手と女性選手の性格特性を比較分析し、スポーツ参加が性格発達と変化に及ぼす影響に対して関心を持っていた。

性格とスポーツとの関係に対する研究は、主にスポーツへの参加が性格形成に及ぼす影響を明らかにし、運動選手の心理的特性を把握してスポーツ適性を探しだし、スポーツ種目の選択とポジションの決定及び選手の選抜のため実施されている。また、性格は、スポーツ活動により変化する可能性があるため、運動不適応者と社会不適応者に関するカウンセリングと心理療法 (psychotherapy) の方法がつかわれている。このような目的で実施された運動選手らの性格特性に関する研究等は、多くの問題点を内包していたため、1970年代末と1980年代初期に至って急激に減っている傾向にある。「このような傾向では、不適切な測定道具と不足な被験者、そして完璧ではない実験設計など問題点のある調査をやり続けるよりは、理論的概念を基礎とすべきであるとの反省から始まったと言いうことができる。」また性格調査を無批判的に受容し、選手達に適用してきた研究者達が、性格検査の限界を知り、過去30余年間の研究結果を検討することに至ったのである。

本研究では、スポーツと性格特性に対する研究結果と理論が無批判的の受け入れられている現実と、これらの研究に対する理論的探索が不足している実状を勘案し、スポーツと性格特性に関連する問題点を先行研究を通じて考察し、スポーツと性格形成に対する一貫性ある研究結果を把握するために、選手と非選手の性格特性、種目別運動選手の性格特性、そして優秀選手と一般選手の性格特性に対する差異を、スポーツと性格特性に関する研究を中心として考察することを目的とする。

*吉備国際大学 **岡山大学

2. スポーツと性格に関する研究の諸問題

(1) 定義及び理論体系の問題

人間行動の多様な個人差を説明する用語の中でPersonality (性格) という単語ぐらい多く使われ誤用された単語はなかった (Berlin, 1970)。

性格と類似する意味で使われる用語としては、人格 (character), 気質 (temperament) などがあるが、性格とはラテン語の *Persna* から由来し人間が持っている性質の総体を意味するものであり、人格というのはギリシア語から由来した言葉で心に刻むこと、彫刻する意味など標識とか特質などの意味にかえて性格と同意語として使われる傾向があるが、人格は価値体系を包含した情意的意志的な面を強調し、性格は行動の統一性あるいは統合という面を重視する傾向がある。

反面、気質は性格の下部構造として感情的特徴を表し、神経系や内分泌系の機能に存在して体質と密接な関係をもつ先天的で生まれつきなもの、すなわち性格の生理学的かつ体質的な基礎をなすもので、性格の身体的側面を現しているといえる。一方、Allport は、人格、性格、気質を区分し、人格は評価された性格で倫理的な概念を示唆するものであり、性格は評価を切り下げた人格として定義し、気質とは生物学的決定因子と密接に関連したもので成長してから別に変わらない性向 (Disposition) であるとしている。

さらに飯田 (1963) は、性格は人間の生活過程の中に来たいわゆる情動的、意志的、反応可能性の総体であり、気質は性格の下層部を作るもので個人の体質に対し解剖学的であり生理学的基礎に根を置いている。

このような性格と気質を階層的に考えると、気質はより内面的で素質的なものであるといえ、性格は外面に現れる行動様式または反応の傾向であって環境から影響を受け、性格の最上部は態度で表出されるものであるといえる。

性格及び特性に関する定義は、性格理論の重要な部分を成している特定な概念によって規定されており、性格の意味を把握することは性格理論を詳しく調べてみた後でなければ可能ではなく、性格研究を先行している学者だとしても、性格に対し意味ある常識的な方法で定義を下すことは非常に難しいことであるといえる。いままで性格及び人格に対する定義は、これらを研究した人と同じくらい多く、また発展しているとみることができる。

心理学の本質的な主体として性格を考察した Allport (1937) は、性格とは自己の固有な環境において適応を決定する個体内での力動的な組織体であるとし、Murphy (1947) は、有機体に流れる連続体であるとした。

Rogers (1951) は、性格とは根本的に現象的なもので、主に説明的な概念として自我の概念に依存するとした。また Catell (1965) は、人間が与えられた環境に置かれている時、人間が何をするかを区別することと定義し、Maddi (1968) は、時間において持続性を持っているもので、直接的な状況で社会的・生理的圧力に容易に理解されるとかされないとかの心理的行動の差異と、これらの共通性を決定する一連の固定的傾向であるとした。

このように多様な定義の問題に対し、多くの学者達は、「Personality は濁った海と同じである」と表現しており (Fisher, 1976)、性格の定義に対する研究は、次の事項が含まれるべきであると主張する (Berlin, 1970)。

- I. 性格に関連する研究調査、機能、法則などのモデルを考慮してみる。
 - II. 性格が及ぼす範囲を決める。
 - III. 性格の概念と特性、そして構造を決定する。
 - IV. 性格の歴史による特別な用語を規定する。
 - V. 性格の一般的な見解等を研究し、これがどのように論議されてきたかを包含させるべきである。
- 一方、Previn (1979) は、性格を4つに分けている。
- I. 性格は構造的な側面と力動的な側面を持っている。
 - II. 性格は究極的に行動によって定義される。
 - III. 性格は一貫性を持つ。
 - IV. 性格は状況と関連し独特な様相をもつものである。

性格は、性格の構造と性格の力動、そして性格の発達と修正など互いに独特であり、関連ある次元に基づき研究されているといえる (Silva & Weinberg, 1984)。

性格の構造は、ある個人の基本的な要素とか特性を示すもので、どのようにそれらが特定な状況で個人の行動的傾向を表すのに、共に混合されるのかを現してくれるのである。性格特性、すなわち個人の所有する比較的永続的な性格に関する研究は、一般心理学とかスポーツ心理学の分野で、たいへん人気ある分野であるといえる。

性格の力動に関する研究は、個人の所有する様々な特性がどのように行為と相互作用するかを究明しようとするものである。具体的にどのように不安水準が、競技遂行に影響を与えるだろうか、または不安水準が、成熟度に影響を与えることによって、成熟動機とどのように相互作用するかに関心の焦点が集められている。性格の発達と修正に関する研究は、特定する個人が様々な性格特性を持つことになる可能性に、影響を与える過程 (遺伝的、環境的) を理解しようとするものである。また、この領域は行動に対するいろいろな修正がどのような経験や仲裁を通じて発生するかを研究する。このような発達

と修正に関する問題は、スポーツ分野のみならず社会全体にも影響を与えるようになる。

性格理論の数多くのことによれば、性格が成長し発達して作用する要因は、個人の特徴をすべて含んでおり、多様かつ複雑で、性格は意図的に変化させることができるとの共通的な見解を持っているが、性格に関する理論は一般的に事実を説明してくれるに至っておらず、性格の全てを受容できる理論はないとのことである。

性格に関する多くの理論はあるが、スポーツと性格特性においては適用されている重要な理論的観点は、決定論的観点 (deterministic perspective) と特質論的観点 (trait perspective) をして相互作用観点 (interactional perspective) などである (silva & weinberg, 1984:62)

決定論的観点とは、人間を一つのエネルギー体系としてみた19Cの決定論的実証哲学の影響を受けた理論で、行動は個人によるものよりは、むしろ個人のため結晶されると主張する。身体的活動を起こすエネルギーは、いろいろな体系の相互作用の結果であるといえるように、精神的エネルギーは行動を産出するために相互作用する様々な無意識体系によって生まれてくるものとみて、各体系は行動に影響を与え、調節することができる原理と機能を持っているものである。多くのスポーツ心理学者が、臨床的用途として決定論的観点に執着したけれど、この理論が無意識過程に余りにも重点をおいたため、外見的行動の間に原因と結果的な関係を測定するのだが実質的には役立たなかった。

特質論的観点という比較的永続的な特性は、いろいろな状況である個人の行動を予言できるというもので、性格特性は一般化することができ、正常の状況でさえ行動を予測できると考えられる。

相互作用の観点という外見的な行動に、状況と人間全ての影響を統合した多くの社会学習論を受容しているもので、状況的な特性を強調し、個人はこの状況によって彼らの行動を調節するのである (Rotter, Chance & Phares, 1972)。状況の特性が変化することによって行動は修正され、個人の独自性は強化の原因と強化の価値概念等を通じて強調されるようになる (Rotter, 1954. Rotter et, 1972)。

一般的に性格においての理論の問題は、一般化 (nomothetic) 対個別化 (idiographic) 論争として要約される。

一般化接近は、全ての人間に適用されることができる一般法則であるという主張によって支持されるものであり、個別化理論は慣例を無視して各人間を取り扱うもので個別化とは反科学的な見解である。すなわち、それは

一般的な法則を追求するのを抑制するかわりに、特殊な現象 (人間) を描写することを助長する。

一般化法則は「無視された未決定 (ignored suspension)」の中間現象を離れ極端的な説明をするため論難が多く、また他の弱点は原因に対し満足な説明ができない点である。

この二つの見解は、理論問題と密接な関係がある。一つは、一般化法則と個別化法則が互いに統合できないことである。我々の関心は、各々の相互補完的性質を重視することであり、この二つの法則から単一のPersonality理論を作ることである。

研究活動分野で方向を提示した多くの性格理論のジレンマとは反対に、スポーツ心理学での現象とか実態に対し、深く実験された研究方法は多くない。

Fraleigh (1969) によると、理論の重要性は、研究を始めるための一つの体系を与える能力で、仮説を立て既に発表された調査研究に対し、疑問を提起するのに役立つと言う。それは適切な研究設計をし、これによる適切な統計方法を適用させるのに助けになり、得られた統計値を整理するための計画を立たせてくれる。また、ある基準に対し理論的分析が必要ならば、どのように解釈するかの方角を提示してくれるようになる。

理論は、より合理的な状態の理論を定立させるのに必要なものである。

(2) 方法論的問題

心理学者らは、90余年前から数多くの行動特性を測定する技術に関心を持ってきた。また、得られたデータをもって統計的技術案内するため、多くの資料が蓄積されてきたが、十分かつ適切なデータをどのように確保するかが問題として残されている。

Cattell (1957) は、「もし、我々が洗練された民族学、賢明な格言、過去数千年の段階を一般的として詳細に記述すれば、二つの必修的条件がある」とした。

- I. 心理学は、生活環境と実験的に統制された状況での限定された行動を正確に測定することを開発すべきである。
- II. 心理学は、より複雑で全体関係を取り扱える数学的な統計分析方法、形態、道具を開発すべきである。

Tyler (1964) は、人々が性格理論の概念を試験しようとするには、いまだに正確な専門語 (技術) がないとしながら、「一般的に、いわゆる性格検査の大部分は、普通の人間の正常の仮説から逸脱された程度の不適応行動と、神経的かつ心理傾向を表わす特殊な変因を測定す

るものを取り扱った」とした。

性格測定における核心は、測定対象と実現性がどの程度関連している現実性の同形異質 (isomorphism) であるとし、また、自然科学とは異なる著しい身体的属性と行動徴候から得られた測定結果を取り扱うことであって、これの構成概念 (constructs) は人工的で特別に設計された特性を現わす単語である。構成概念と現実性の間にどの程度の関連があるかを推論することは、おおよそ不可能である。実相構成概念の妥当性は、行動徴候を研究調査して正確に記述したものである。すなわち、研究者が心理測定から得られた情報を実行可能であると判断したことである。

測定問題は、心理学であれ体育であれ性格研究において久しいことである。今までは、コンピューターでデータを限定させ統計的分析を容易に処理してきたけれど、全実態現状を論証するには不備な点が多いといえる。

性格は、直接または間接的な方法によって評価することができるが、スポーツ分野での研究者の大部分は E P P S (The Edwards Personal Preference Schedule), MMPI (The Minnesota Multiphasic Personality Inventory), C P I (The California Psychological Inventory), M P I (The Maudsley Psychological Inventory), 16 P F (Sixteen Personality Factor Questionnaire) などのような研究者個人で実施できる直接方法を選んでいる。

特に、MMPIは特殊な臨床的目的のために制作された検査道具であることを考慮する時、今までの研究結果に深刻な問題を提起する人は多い。

しかし、Morgan (1968) は、他の検査紙を使用した研究結果を直接比較するのは難しいけれど、研究者がすべての検査に対し十分理解し彼らの実験結果を適用して、解釈するための予定された方法に従うことは十分可能であると主張する。

Husman (1969) と Cooper (1969) などを始めとする多くの文献で、身体活動と性格の発達を比較するため、集団は次のように任意的に分類してきたことがわかる。

- ・運動選手：非運動選手 (一般人)
- ・チームスポーツ参加者：個人スポーツ参加者
- ・レクリエーション参加者：レクリエーション非参加者
- ・室内スポーツ参加者：室外スポーツ参加者
- ・体育専攻者：非体育専攻者
- ・スポーツ技量の優秀な人：スポーツ技量の劣等の人
- ・特殊スポーツをする人：普通スポーツをする人
- ・グループ活動者：非グループ活動者

- ・A種目の選手：B種目の選手
- ・体力の優秀な集団：体力の劣等な集団
- ・試合前：試合後
- ・競争的スポーツ：非競争的スポーツ
- ・チャンピオン：一般選手
- ・男性：女性

Smith (1969) は、このような形態で分類された研究に対する妥当性は、多くの疑問を受けており、非生産的であることが証明されたと断言している。また、このような任意的な分類は一般的な分類方法と食い違っているだけではなく、多様な或るいは相反するありふれた結果を得るようになったために、全体を観察、測定した後、関連変因以外に外的変因 (intervening variables) を厳格に統制する方法が要求され、一連のクラスター分析 (cluster analysis) による標集方法が望ましい。

Morganは、このような分類の一般的な問題は研究者が受け入れられる程度の集団関係の定義を使用するのに失敗したというのである (Suinn, 1980)。

一般的な実行は能力水準間の差異を区別せず、本来の運動下位集団を測定するもので簡単になされてしまったのである。そして研究者達が、このような研究領域で使われた独立変数に対する適切な操作的定義を用いることに失敗したとの事実から、一般的な混同が存在することはさほど驚くほどではないという。

このような多くの問題点を内包している性格に関する研究は、急激に減少しているが、SilvaとWeinberg (1984) は、性格の領域はまだ生きており健在すると前提しながら、より妥当で信頼できる評価道具が活用されることによって、性格に関する研究も活性化されると主張している。

3. スポーツと性格形成

性格とは、前述したように人間行動の全体的な傾向性というもので、個人の性格特性は、その人の家庭や地域社会が持っている思考方式、または所属している集団での生活経験や行動様式が習慣化されたものとみることができる。

このような観点から、多くの学者が性格特性を研究し、その成果が報告されている。

(1) 選手と非選手の性格特性

スポーツと性格に関する研究の大部分は、選手と一般人との間の性格にどのような差異があるのかという問題を究明することにあつた。このような研究結果は、非常に混乱しており、一般的に推論するには相当の問題点を持っていることは事実であるが、多くの研究者達は運動

選手は独特の性格特性を持っていると信じられている。

BergerとLittlefield (1963) は、43名の運動選手集団と49名の運動経験集団、そして49名の非運動選手集団を対象にC P I 検査を実施した結果、各集団に性格の差が存在すると明らかにしており、Hunt (1969) は、Gordon Personal Profileを利用し、35名の白人および22名の黒人運動選手と35名の白人および19名の黒人非運動選手の性格特性を調査した結果、白人および黒人の運動選手集団は類似した性格特性を持っており、黒人と白人の非運動選手も類似した性格特性を持っていると明らかにしている。

このようなHuntの研究結果は、白人と黒人を問わず選手だけが持っている特定な性格特性があることを示唆するのである。また、Kane (1960,1966) は、16 P Fを用いた性格検査結果を分析してみた結果、少なくともアメリカンフットボール選手達の持つ特定の性格類型が存在することは、ほぼ疑う余地はないとし、CoferやJohnson (1960) も16 P Fを利用した広範囲な文献の考察から約20件の研究だけが、優秀選手の性格構造を理解するのに寄与していると明言しながら、例外的な運動選手は特別な性格特性を持っていると立証した。

以上のような研究論文を分析してみると、運動選手は一般人と区別できる一般的な性格特性があると仮定できるだろう。しかし、運動選手が一般的に持っている独特な性格特性は何であるかの回答を求めるには難しいようである。

GolasとDowell (1971) は、E P Iを用いて41名の非運動選手と82名の運動選手の性格特性を調査した。その結果、運動選手達は非運動選手達より顕著に外向的な面を有していると報告しており、O'connorとWebbは、16 P Fを利用してバスケットボール13名、体操6名、テニス9名、水泳13名など41名の運動選手と14名の非運動選手を対象に性格特性を調査した結果、知能 (intelligence)、過激性 (radicalism)、自己充足 (selfsufficiency)、統制性 (control) 等において、差異があったと述べている。また、Shusher (1964) は、MMPIを利用して運動選手と非運動選手の性格差異を研究した。その結果、運動選手達は、外向的尺度と知能では低い水準をみせたけれど心理的尺度では高かったが、これは運動選手達が身体健康に対しより大きい配慮のあることを意味するものである。Schendal (1965) は、C P Iを用いて高等学校および大学運動選手と非運動選手との間の性格特性を調査した結果、高等学校運動選手達は非運動選手に比べ、より沈着で支配力があり自信感があると現れた。大学運動選手達は、非運動選手より成熟感と潜在性そして

知能能力においては、より低いものと現れた。

一方、花田 (1980) らは、スポーツ未経験者とスポーツ経験者の性格特性に対して、スポーツを経験した選手と関係なく、スポーツ経験者がスポーツ活動に対する指向度が強く楽天的で支配性が強いと報告しており、秋山氏 (1960,1962,1964) らは、Kretschmerの分裂気質、循環気質、粘着気質、ヒステリー性格と神経質的傾向など5つの類型の質問紙を用いて一般学生と運動選手を比較した。その結果、運動選手集団は、神経質的傾向が目立ち、循環気質が上位を占有し、分裂気質とヒステリー性格が低いことが現れた。

しかし、飯田 (1963) は、MMPIをスポーツ適性検査として応用するため試験製作されたS P I (Sport Personality Inventory) を用いた研究で、運動選手は非運動選手に比べ神経質が少なく軽易かつ活発的であって、男性的な特性を持っていると報告している。

また、花田 (1980) は、11大学の男子運動選手450名と39名の非運動選手を対象にY-G性格検査を実施した。その結果、運動選手は、一般学生に比べ劣等感が少なく心配も少なく、活動性が強いものと現れた。さらに、支配性が強く社会的適性傾向が高いと現れた。このような性格特性を統合し特性群として見た場合、運動選手は活動的で社会的優位性や支配欲が強く外向的であるが、若干、衝動的な面があると現れた。

選手と一般人との間の性格特性をより明確に調べてみるため、優秀選手と非選手の間の性格を比較した研究もある。Fox (1979) は、16 P Fを用いてプロテニス選手26名と一般人の性格特性を比較したが、選手達はだいたい他性に無心であり疑心性が多く、意志決定と行動を自主的にする傾向が高いことを現した。また、独断的であり支配性が強い方であると現した。

O' lson (1966) も16 P Fを用いて優秀テニス選手と一般人との間の性格特性を比較したが、選手は一般人に比べ情熱的で主観的であり、社会的環境に対する適応度が高いとした (Singer:1982)。

Shusher (1964) は、野球、バスケットボール、アメリカンフットボール、水泳とレスリングで勝利した高等学校選手権達と同じ年頃の非運動選手にMMPIを適応して調査した。その結果、運動選手と非運動選手達は、慶兆症と妥当性を除いたMMPIの全ての尺度で、互いに異なっていたと報告している。

女子選手と一般人の性格特性を比較したO'connorとWebb (1976) は、運動選手41名と一般人14名を16 P Fで比較した結果、知能と過激性そして自己充足と統制の領域で差異があったと明らかにしている。花田 (1980)

は、454名の女子選手と182名の一般人を比較した結果、男子の傾向より顕著な差異を発見できたと述べている。即ち、女子選手達は、一般人に比べ憂鬱症劣等感そして神経質が少なく、活動的で支配性や攻撃性が強く、社会的接触を好む傾向があるがさほど思索的ではないとの性格特性を現していると言う。また、性格特性群で見ると、女子選手の場合、一般人に比べ情緒的に比較的安定しているし活動的で社会的であるが衝動的な面があると言う。このような結果は、女子選手達は情緒的に安定した外向性性格で社会的活動性が高いことを示唆する。

スポーツ心理学ジャーナルに掲載されている性格に関する研究結果の中で、ある程一致している部分は、運動選手たちが性格の神経安定領域（神経性-安定性）において正常的な状態にあると言うことである。実際に米国のレスリング代表選手達は、世界選手権大会の24~28時間前に検査した時、非常に安定していたとの報告があり（Morgan, 1968）、このような結果は、安定性が高度水準の競争において必修条件となるかも知れないことを示唆するものである。Pierce（1969）は、運動選手達が他の学生達より区内精神病院診療所を少な目に使用しているようであると明らかにしながら、運動選手と非運動選手の差は精神病の病理学的程度より忍耐できる能力と関連があると主張している。また、Booth（1958）は、MMPIを用いて、大学運動選手が新入生非運動選手そして高学年非運動選手より不安水準が顕著に低いことを発見した。更にLittle（1969）も、運動選手及び非運動選手の神経性を比較して見た結果、運動選手達は神経過敏誘発が少なかったが、非運動選手の神経過敏は非常に一般的現象であったと報告している。

また、非運動集団が内向的で社会性が不足していると表れたのに比べ、運動選手達は外向的で社会的であると表れた。

このような、結果を分析してみると、選手達とくに優秀な選手達は、一般的に不安水準が低く不安を調節できる能力が抜きんでいる事実がわかる。

以上のように、運動選手と一般選手との間の性格特性に関する研究は、非常に混乱しており被験者集団と尺度が違うために、ある結論をくだすのはとても難しい。だが、一般的に選手達の性格特性は、一般人達に比べ情緒的に安定しており、無事太平であり外向的で活動的、支配的特性が強いということが出来る。しかし、このような特性が、運動経験によって形成されたものと結論を下すには多くの問題がある。元来、このような性格形成を持っている人が、運動選手になる傾向にあるのか、そうでなければスポーツ経験によって性格特性を持つように

なるのかは明白ではないからである。

WernerとCottei（1966）そしてLukehartとMorgen（1969）の研究結果は、競技者の性格特性の差異は初めから存在していたものであり、限定された期間の競技経験によって形成されたものではないことを示唆している。また、Schendal（1965）の研究結果は、運動選手集団と非運動選手の集団が始まる時から性格特性に差異があるのを示唆しており、性格構造から運動選手群と非運動選手群に対する横断的研究が明白な限界をもつことを立証している。

（2）運動種目別性格特性

スポーツの形成は、様々であって種目別に独特な競技形態を取っている。陸上と水泳のように個人スポーツもあれば、一人では成立しない集団スポーツもある。そして、このような種目の発生は、考案された国の国民性が長い歴史を通じ伝統として継承されたものなので、スポーツは文化的遺産であるといえる。また、性格が、所属された集団においての生活経験や行動様式が習慣化されることによってできあがるという観点からみると、スポーツの種目によっても選手達の性格特性に差異があるのではないかと考えることもできる。

Singer（1969）は、E P P Sを用いてオハイオ州立大学に在学中の26名の代表野球選手と33名の1年生の野球選手そして10名のテニス選手など69名の選手を対象に性格構造を比較した。その結果、野球選手は屈辱要因において他の二つの種目より有意に高く現れ、遮断（妨害）変数は他の二つの種目より低い点数を記録しており、成熟点数においてはテニス選手より低いと表れた。そして、自律性において一般人より低く、支配性においてはテニス選手より低いと表れた。

今野（1972）なども、Kretschmerの気質テストを運動経験3年以上の各運動選手に実施した結果を報告している。野球はヒステリー性格、水泳とバレーボールは優うつ症、柔道は粘着性、サッカーは分裂性、テニスは神経質性向が高く、体操は分裂性と神経質性向が、バスケットボールはヒステリー性格と粘着性が、そして卓球は優うつ症、ヒステリー性格と分裂性が顕著であったが、剣道選手達は目だつ特性がなかったと明らかにしている。

このような種目別選手の性格特性に関する研究は、多数の研究者達によって提示されているが、選手と非選手の性格特性に関する研究結果より非常に複雑で混乱しているために、個人競技で類型化して性格の比較を実施した研究もある。

PetersonとTrousdale（1967）などは、16 P Fを用いて女子選手の個人種目と集団種目の性格構造を比較した。

被験者は、AAUと米国のオリンピック選手達で水泳、ダイビング、乗馬、フェンシング、カヌー、体操、陸上などの38名の個人競技選手達とバレーボール、バスケットボール選手で構成された57名の集団競技選手達であった。検査結果は、個人種目選手達は支配性があり攻撃性と冒険心が多く、自負心が強く、より実験的であるということが発見された。反面、集団種目選手達は、強い意志と鋭敏かつ世俗的な賢明さがあつた。そして、このような女子選手達を個人対集団種目の差異を考慮せずの一つの標本として東ねたとき、次のような性格特性があることが明らかになった。女子選手達は、冷静で内向的であり、情緒的安定が高かった。また固執が強く冒険を好み意志が強かった。さらに、慎重さと自信、平穩さ等の性格特性では、一般人と類似していると現れた。

一方、花田(1980)は、113名の運動選手を個人種目と集団種目に区分して一般人と性格特性を比較した結果を次のように報告している。

男子の場合、非選手と個人種目選手達は性格特性で有意な差を見つけだせなかったが、集団種目選手達は、非選手に比べ攻撃性の強い人が多いことが判明した。女子の場合、集団競技選手達は、非選手に比べ不安がなく活動的な性格を持ち、個人種目選手より優うつ症が少なく現れた。

このような、事実を総合してみると個人種目選手達は平均的な性格特性と類似し、集団種目選手達は運動選手達の性格特性をより多く持っていると見ることができる。しかし、運動競技を分類した類型に問題があるので、一般的な傾向を明確に把握するには難しさがある。

(3) 優秀選手と一般選手の性格特性

多くの研究者達は、究極的に性格が運動遂行の差を生じさせると信じてきたために、優秀な選手達が持っている性格特性に対して関心を持ってきた。

また一方で、どんな性格変因が競技の成功に役立ち必修的なものかを確認することができるならば、競技力向上のために具体的な手助けを与えることができるので、特定な性格次元が競技の参加と成功に寄与するかという研究は非常に重要であるといえる。

Williams(1978)は、16PFを利用して、大学のバスケットボール選手の中から主戦選手と補欠選手として一般学生を対象とし、性格特性を調査した結果、主戦選手達は補欠選手や一般学生に比べて知的能力が高く自己統制性が強い反面、補欠選手よりは情緒的安定性が低いと報告している。ThirerとGreer(1981)は、14名の上級、14名の中級、24名の初心者など52名のボディビルダーと47名の非選手を対象EPPSを実施した結果、上

級、中級、選手達は初心者や非選手に比べ成熟欲と変化のポイントにおいて高く現れていることを明らかにしている。また、Kane(1964)は、16PFを利用して英国のプロサッカー選手100名と一般のサッカー選手達の性格を比較した結果、プロサッカー選手は一般サッカー選手達に比べ情緒的に安定しており、外向的で自己統制性が高いとっており、KrollとPeterson(1965)も16PFを利用して勝利を獲得した5つのサッカーチームと敗北した5つのチーム及び一般人の性格特性を比較した結果、勝利を獲得した5チームは冒険的で大胆であり、自己確信的・自己満足的で自己統制性が高いと報告している。NelsonとLnger(1963)は、運動遂行能力と性格特性変因との間の相関関係を表した研究で、優秀なサッカー選手達は一般選手達に比べ情緒的に安定しており、冒険的で大胆であり自己統制性が高いとした。

JohansonとHutton(1954)等は、アメリカのチャンピオン能力水準にある12名の選手達にRorschach TestとHouse Tree Testを適用した結果、秀でた運動選手達は過激な攻撃性、感情的抑制から逃れようとする傾向が高く、一般化された不安、知的水準の高い特別な自己確信などの感情があったと報告している。

このような研究などが示唆しているように、種目の選手達の中で優秀な競技者と一般的な競技者間に違った性格特性が存在しているということは、特定な性格要因が競技力に影響を及ぼしていることを意味するのである。しかし、また他の研究者達は、優秀選手と一般選手間に特別な性格の差がないことを明らかにし、競技力との関連がないことを提示し、このような累計の研究に対する問題点を指摘している。

Rushall(1970)は、16PFを利用してカリフォルニアとインディアナそしてニュージャージにあるチーム等に所属している338名の水泳選手達に対し性格特性を調査した結果、水泳での成功的な運動遂行との関連がなかったとしており、Kroll(1967)もアメリカのオリンピックチームとNCAAそしてNAIBのチャンピオン決定権に参与したとか、チャンピオンである28名の最高水準の運動選手とコーチ達によって優秀な選手に分類され、少なくとも競技の60%に勝利した33名の大学レスリング選手、そして平均程度以下と評価された同じチーム内にいる33名のレスリング選手に16PFを適用した。その結果、それらの集団間にいかなる差異点もなく、ただレスリング選手達は強靱性の要因において基準より顕著に高いことが現れた。

Laplace(1954)は、MMPIを利用してメジャーリーグの野球選手達とマイナーリーグの選手達の性格特性を

調査した結果、メジャーリーグの選手達は自己修養がよくなされており、独創力が高く、他の人と共にうまく行動していけることを発見した。しかし、2つの集団は、普通の人たちの標準偏差内で記録され、正常水準との差異がないことを示した。このような研究は、メジャーリーグの選手達がマイナーリーグの選手達より良く適応していることを表しているが、これらの差異はプロ野球に各集団が所属される以前にすでに存在しており、以後、成功を決定する役割をしてきたことを示唆するものである。

Kane (1964) は、性格と身体能力に関する論文を調査した結果、運動能力と不安に対する安定性、そして内向性に対する外向性との間に肯定的な関連性が存在するとした。しかし、今日の研究結果を基礎として探してみると、性格と運動遂行の相互作用に関し、ある一般化を試みることは危険なことと思われる。このような領域の研究に対する最も深刻な欠点の一つは、調査の単一性にある。即ち運動能力を理解しようとするテストが、性格領域に限定されているということである。このような問題を解決するために、多くの研究者達は、まず初めに多様な研究チームを組織し、2番目に理論的モデルを採択しなければならず、3番目に独立変数及び従属変数の明確な操作的定義を使用し、4番目に合理的な標本抽出方法を使用しなければならないと提言している。

4. 結 論

- (1) これまでのスポーツと性格形成に関する研究の問題点と、それに関する一貫性ある研究結果を把握するために、先行研究を分析し考察した結果、次のように要約することができる。

初めに、スポーツと性格特性に関する研究などはデータ収集と実験設計そして測定器具の問題によって非常に混同されており、一貫性ある結論を出すことができないでいる。

- (2) 選手と非選手の性格特性に関する研究結果などは一致しておらず、一般的に選手が非選手より情緒的に安定しており無事太平であり、外向的、活動的、支配性的特性が著しいとの見解を示していた。
- (3) 個人種目と集団種目に関する研究結果などは、一般的に集団種目の選手達が個人種目の選手達に比べて、外向的であり活動的また明朗な性格特性を持っているとの見解が多かった。
- (4) 優秀な選手と一般選手に対する性格特性に関する研究は、優秀選手が一般的に情緒的に安定しており外向的であるといわれているが、実質的な差異はないとの報告が多かった。
- (5) 選手と非選手、優秀選手と一般選手、種目による性格の差がどの程度あるのかということは性格形成自体が遺伝的素因を持ったものでないとするれば、環境的な支配を受けたものなのか、その影響度を一般化するのには困難である。
- (6) 沈滞し混同されている研究を活性化させるためには、独立変因および従属変因に対し明確な操作的定義や信頼性ある妥当な検査器具、そして合理的な標本抽出方法が要求され、長期間にわたる縦断的研究が要求される。

引用・参考文献

1. 相場 均, 性格, 中公新書, 中央公論社, 1969.
2. 秋山誠一郎, 中井忠男, 本間周子, 鎌守富士子, スポーツマンの適性について(性格), 体育学研究5-1, 1959.
3. 秋山誠一郎, 中井忠男, 本間周子, スポーツマンの適性について(性格その2), 体育学研究7-1, 1961.
4. 秋山誠一郎, 中井忠男, スポーツマンの適性(性格その3), 体育学研究9-1, 1963.
5. Allport, G.W., Personality: A psychological interpretation, New York: Holt, 1937.
6. Berger, R.A., D.H. Littlefield, Comparison between football athletes and nonathletes on personality, Research Quarterly, Vol. 40, 1969.
7. Berlin, P., Prolegomena to the study of personality by physical Education, Quest, Monograph VIII, 1970.
8. Booth, E.G., Personality traits of athletes, Research Quarterly, Vol. 29, 1958.
9. Cattell, R.B., Personality and motivation structure and measurement, New York: World Book company, 1957.
10. Cattell, R.B., The scientific analysis of behavior, Baltimore: Penguin Books, 1965.
11. Cofer, C.N., Personality dynamics in relation to exercise and sports, Science and Medicine of exercise & sports, New York: Harper, 1960.
12. Cooper, L., Athletics, activity and personality: A Review of the Literature, Research Quarterly, Vol. 40, 1969.
13. Fisher, A.C., Psychology of sport, Mayfield Publishing Company, 1976.

14. 福島 章, 性格をどう生きるか, 彩古書房, 1984.
15. Fox, A., If I'm the better player, why can't I win? Norwalk: Simon & Schuster, 1979.
16. Goals, R. W., & L. Dowell, Selected personality characteristics of high school athletes and nonathletes, *Journal of Psychology*, Vol. 1,
17. 花田敬一, スポーツマンの性格, 不昧堂書店, 1980.
18. 星野 命, 河合隼雄(編), 人格心理学4, 有斐閣, 1975.
19. Hunt D. H., Across racial comparison of personality traits between athletes and nonathletes, *Research Quarterly*, Vol. 40, 1969.
20. Husman, B. F., Sport and personality dynamics, *Proceedings*, 72nd National College physical Education Association, 1969.
21. 飯田頌男, 松井三雄, 杉本功介, スポーツ適性のためのS. P. I作成試案(2), 体育学研究8巻, 1963.
22. 依田 明, 性格はどのようにつくられるのか, あすろ書房, 1976.
23. 依田 新, 性格心理学, 金子書房, 1968.
24. 伊藤隆二・松原達哉, 心理テスト法入門, 日本文化科学者, 1976.
25. Kane, J. E., Psychological correlates of physique and physical abilities, In *International research in sport and physical education*, ed., E. Jokl and E. Simon, 1964, 85-94. Springfield, Ill: Charles C. Thomas.
26. Keyon, G. S., A Sociology of Sport: On Becoming a sub-discipline, In *Sport and American Society*, 2nd Ed., edited by G. H. Sage, Reading, Massachusetts: Addison-wesley publishing Company.
27. 今野義孝, Kretschmerの気質Test結果から考察した各種運動部の特性, 日本体育学会第23回大会, 1972.
28. Kroll, W., Sixteen personality factor profiles of collegiate wrestlers, *Research Quarterly*, Vol. 38, 1967.
29. Kroll, W. & K. H. Personality factor profiles of collegiate football teams, *Research Quarterly*, Vol. 36, 1965.
30. Laplace, G. P., Personality and its relationship to success in professional baseball, *Research Quarterly*, Vol. 24, 1954.
31. Little, J. C., The athlete's neurosis-a deprivation crisis, *Acta Psychiatrica Scandinavia*, Vol. 45, 1969.
32. Lukehart, R., W. P. Morgan, The effect of a season of interscholastic football on the personality of junior high school males, *AAHPER*, 1969.
33. Maddi, S. R., Personality theories: A comparative analysis, Homewood: Dorsey press, 1968.
34. Morgan, W. P., Personality characteristics of wrestlers participating in the world championships, *Journal of sport medicine & Physical fitness*, 1968.
35. Morgan, W. P., & D. L. Costill, Psychological characteristics of the marathon runner, *Journal of sports medicine & Physical fitness*, Vol. 12, 1972.
36. Morgan, W. P., & W. M. Hammer, Psychological effect of competitive wrestling, *AAHPER*, 1971.
37. Murphy, G., Personality: A Biosocial approach to origins and structure, New York: Harper, 1947.
38. Nelson, D. O., P. Langer, Fetting to really know your players, *Athletic journal*, Vol. 39, 1963.
39. O'connor, J. L. Webb, Investigation of personality traits of college female athletes and nonathletes, *Research Quarterly*, Vol. 47, 1976.
40. Pervin, L. A., Personality: Theory, assessment and research, New York: John wiley & sons, 1975.
41. Peterson, S. L., Ukler, W. W., Trousdale, Personality traits of women in team VS women in individual sports, *Research Quarterly*, Vol. 38, 1967.
42. Pierce, R. A., Athletes in psychotherapy; How many, How come? *Journal of american college health association*, Vol. 17, 1969.
43. Rogers, C. R., Client-centred therapy: Its current practice: implications, Boston: Houghton, 1951.
44. Rotter, J. B., J. E. Chance, E. J. Phraes, Applications of social learning theory of personality, New York: Holt, Rinehart & Winston, 1972.
45. Rotter, J., Social learning and clinical psychology, Englewood cliffs, NJ: Prentice Hall, 1954.
46. Rushall, B. S., An investigation of the relationship between personality variables and performance categories

- in swimmers, *International journal of sport psychology*, Vol.1, 1970.
47. 佐治守夫 (編), 講座心理学10 人格, 東京大学出版会, 1970.
 48. 佐野勝男, 性格の診断, 大日本図書, 1965.
 49. Schendal, J., Psychological differences between athletes and nonparticipants in athletics at three educational levels, *Research Quarterly*, Vol. 36, 1965.
 50. Shusher, H.S., Personality and intelligence characteristics of selected high school athletes and nonathletes, *Research Quarterly*, Vol. 35, 1964.
 51. Silva, J.M., R.S. Weinberg, *Psychological foundations of sport*, Champaign: Human Kinetics Publishers, Inc., 1984.
 52. Singer, R.N., *Coaching, athletes, and psychology*, New York: McGraw-Hill, 1972.
 53. Singer, R.N., Personality difference between and within baseball and tennis player, *Research Quarterly*, Vol. 35, 1969.
 54. 塩見邦雄, 金光義弘, 足立明久 (編), 心理検査・測定ガイドブック, ナカニシヤ出版, 1982.
 55. 世良正利, 日本人のパーソナリティ, 紀伊国屋書店, 1963.
 56. Smith, Personality and performance Research New theories and Directions required, *Quest*, Monograph XIII, 1970.
 57. 瀧本孝雄, 鈴木乙史, 清水弘司 (編著), 性格の心理, 福村出版, 1985.
 58. Tyler, L.E., *Toward a workable psychology of individuality* Reaeach in *Personality*, New York: Holt, Rinehart and winston, Inc., 1964.
 59. Johnson, W.R., D.C. Hutton, G.B. Johnson, Personality traits of some champion athletes as measured by two projective tests: The Rorschach and H-T-P, *Research Quarterly*, Vol. 25, 1985.
 60. Whiting, H.T.A., *Acquiring ball skill*, Philadelphia: Lea & Febiger, 1969.

平成3年10月21日受付

平成3年11月7日受理